

考古学の立場からみた日本と韓国、そして現在の日本と韓国

明治大学大学院 金 恩正

■ひねものに対する執着

私は幼いころから屋根裏部屋の匂い、古い本の匂いが好きであった。それでときどきその匂いが懐かしくなると、わざわざ屋根裏部屋に上がってあれこれ昔の跡をざっと見たり、屋根裏部屋の一角に座って古い本を読んだりして、気分転換をした。そのように、時間がたつにつれ、古くなり、もっと美しくなる、そして簡単に救うことができないものに対する憧れが、幼いころから私の中に内在していたようである。そのためか私の手垢のついたもの、私と長時間にかけて共有したものに対する執着が強い方である。そうして誰かの手垢のついたもの、あるいは人の息づかいが感じられるものからの魅力を、ほかの方法で楽しむために大学の史学科に入学することになった。

■遺物を通した旧石器人との初めての出会い

私が韓国で入学した大学の史学科は韓国史・東洋史・西洋史・考古学の大きく4分野に分かれていた。そのなか、韓国史・東洋史・西洋史は高校時代にも教科書などで簡単に接することができたので、なじみのある分野であったが、考古学という分野は詳しく接した経験が全くなかったので見慣れなかった。したがって、歴史学を勉強する学生として歴史学と関連のあることについては何でも経験したいと思い、大学1年の夏休みに考古学の発掘調査に参加した。

このころ、私が参加した現場調査は旧石器時代に属する石器製作地の発掘調査であった。現在の地面よりそれほど深くない地層の中から数多い石の破片が散ったまま出土した。その構成は道具をつくるために用意した石材、下ごしらえ状態の材料、道具を製作する時に使う器具、そして製作された道具などが多少複雑な様相であらわれた。私たちが生きている現在の地表よりせいぜい10cmぐらい掘り下げただけであるが、その地層から2万年前にあたる後期旧石器時代の人々の跡がそっくりあらわれたのである。すなわち、2万年の幕を取り除き、私が初めてその旧石器人に会うこ

とができるようになったのである。当時、その感激というのはいかなる言葉でも表現できないほどの感動であり、その感動の強さが今の私を導いたのである。



発掘調査の様子（韓国）

（2010年に筆者撮影）

■考古学の立場からみた日本と韓国

考古学は主要資料を野外の発掘調査によってさがし、現場調査が終わればその資料を研究室に運んで、報告書作成のために遺物の整理を行う。

ところで、国土開発事業と繋がりがあがる建築および土木工事や土砂の採取などが増えた1990年代後半以後の韓国では、発掘調査の需要が増加する一方である反面、供給できる調査員の不足が続き、需要と供給の不均衡がもたらされた。この現状を打開できる最も早い方法として、現場調査と報告書作成という2段階システムの所要期間を短縮させるという意見が集められた。あわせてこのような期間短縮による、より多くの調査の誘致および実行は、各調査機関の運営や維持のための財源確保の方案として広く推奨される雰囲気であった。このような短期間の調査および報告書作成は真面目な分析をあきらめたまま、単に遺物と遺構だけを整理して報告する方向に流れ、結局、韓国における考古学が学問的に位置づけられることができない原因となったわけである。

一方、日本の場合、すでに1960～70年代の高度成長

期に開発事業がさかんに行われたし、1980年代以後からはずっと蓄積された考古資料に基づいた、より多くの研究者らの研究方法論に対する活発な議論が続いた。その結果として、遺物をつくった過程を逆追跡し、人の移動経路を類推してみる遺跡構造の分析方法、実際の遺物をつくってみたり使ったりする実験考古学などの研究方法論が定着されることになった。このような方法論は単に遺物と遺跡の個々分析にとどまらず、社会構造を再構成し、人の移動に関係した暮らしを具体的に復元できるようになったのである。

このような両国におけるそれぞれ違った研究背景および経過とは対照的に、とくに後期旧石器時代において日本と韓国は共通点が確認できる。後期旧石器時代の当時は氷河期に該当し、海水面が今より150m以上低かったし、地形的に朝鮮半島と日本列島の間の海が今よりはるかに幅が狭かった時期である。したがって、朝鮮半島から日本列島までの人の移動を推測することができる。そして実際これを証明するように、朝鮮半島における後期旧石器時代の遺跡で出土する遺物が日本列島でも出土し、とくに九州地域における細石刃核さいせきじんかくと剥片尖頭器はくへんせんとうきはそのよい例になる。

このように韓国と日本、すなわち国境のなかった後期旧石器時代の朝鮮半島と日本列島の両地域では共通した石器が使われたことが認められ、朝鮮半島の人類が日本に移住したのを類推することができるようになった。さらに視野を東北アジアの方にもう少し広げて検討すれば、沿海州・シベリア・中国などにおける後期旧石器時代の遺跡でもやはり共通する遺物が出土していることを確認することができる。したがって、朝鮮半島はもちろん東北アジアの全体を対象とし、日本の研究方法論を身につけ遺物および遺跡構造の分析

に適用しようと思い、私は日本への留学を決心することになった。

■現代における日本と韓国

私の留学生活は2008年春に始まった。春というが、2008年は4月末ごろまでとりわけ寒かったし、オンドル文化が発達していた韓国から日本に渡ってきたばかりの私が接した畳の部屋は、さらに寒かったという記憶が頭の中に残っている。その後、畳に慣れるころからは桜の豪華さ、アジサイの清楚さにすっかり魅せられ、暇さえあれば散歩をし、あちこちのぞき込んだ東京の雰囲気は格別であった。個人の家はさまざまな花と木で美しく手入れされていたし、壁は低く木で囲まれていた。さらに、数多くの家が各々個性を表していて、町内見物だけしていても退屈しないほどであった。

これに比べて韓国の住宅はレンガやコンクリート壁が高く囲まれていて、住宅のデザインもだいたい似ている。さらに、最近、高層アパートの住居文化が定着し、冷たくて硬直したアパート村があちこちに立っているだけなので、町内の独特の雰囲気を感じるのには難しい。このような雰囲気の違いは人の姿でもあらわれ、日本人の姿は韓国より個性表現が強く自由にみえ、開放的な社会という気がした。

しかし、日本はそのような町の雰囲気とは違って、個人はお互いの空間と時間をむやみに公開せず、相手に心をあらわしてくれない閉鎖的な姿をみせて、大変驚いた。これもまた韓国とは反対であった。韓国はたとえあちこちに壁があって閉鎖的にみえるけれど、その壁は単に空間の区分に過ぎなく、隣に訪れ、時間と空間を共有するのは一般的な姿である。すなわち、開放的な町の雰囲気とは対照的に自分の空間と時間を邪魔されない日本の社会と、閉鎖的な町の雰囲気とは反対にお互いの空間と時間を一緒に過ごす韓国の社会とはあまりにも対照的であった。このアイロニーは何だろう。より先進国に進めば進むほど個人が重視されもっと大切にされるのか。人々の疎通が減る先進国は何のための発展であろうか。人間そして発展に対して今もう一度考えると、現在の日本と韓国の姿から、人間愛がよりいっそう懐かしくなる。先進国の隊列に上がって個人がより大切にされるのは嬉しいことであるが、人の疎通に慣れている韓国人である私としてはなぜか寂しくなる。